

山田三郎

## 『アジア農業発展の比較研究』

東京大学東洋文化研究所 1992.2 xxvi+445 ページ

## I

本書は、著者の四半世紀にわたる「アジア農業発展の比較研究」の成果を集大成したものである。著者の一貫した分析姿勢は、利用可能な統計資料を徹底的に駆使し、農業発展のプロセスを国際的な視点から可能な限り数量的に把握し、そこから農業発展の普遍性・法則性を抽出することにある。本書では実に150を越える図表を用い、アジアの農業発展の国際的位置づけと発展のメカニズムが分析されている。壮大なパースペクティブを持ちつつ、膨大な統計資料を丹念に整備し、それを体系的に分析した研究努力には敬服せざるを得ない。

これまで農業発展の国際比較を行った研究はいくつもあった。代表的な研究としては例えば Y. Hayami and V. W. Ruttan (*Agricultural Development: An International Perspective*, Revised edition, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1985) があげられよう。しかし過去の研究では、国別の集計されたデータを用い、生産関数分析等の手法によって全般的関係の把握に力点が置かれてきた。それはそれで意味のあることであるが、部門別、投入要素別の基礎的なデータの分析が不十分であったために、農業発展の経緯を現状に則して理解することには困難があった。本書の目的の一つには、国際間・異時点間の農業発展のコンシステントな比較を可能にするような基礎的なデータの整理と検討が含まれており、アジア農業の全体像を的確に把握するうえで貴重な統計的事実が数多く報告されている。

こうした包括的かつ詳細な国際比較は過去に行われてこなかっただけに、本書から学ぶことはきわめて大きいものがある。本書は、これからのアジア農業の発展についての研究を一層促進するうえで、疑いもなく重要な一石を投じたと評価できる。

## II

本書は、第I部「世界の中のアジア農業：アジア農業発展の国際的位置づけ」、第II部「アジア諸国

農業発展の国際比較」、第III部「アジア農業発展の教訓と21世紀の農業開発戦略：世界的視野からの展望」に分かれ、序章を含めて15の章から構成されている。分析の力点は第II部に置かれ、第5章から13章までがアジア内部の農業の比較分析にあてられている。

本書がカバーする「アジア」とは、日本を含めた東アジアから東南アジア、南アジアはもちろんのこと、トルコに至る西アジアまでをも含む35ヶ国である。FAO統計を活用しつつ1961-65年、1979-81年、1985-89年の各平均値に関して、(1)実質農業生産額の増大、(2)農産物構成の変化、(3)農業諸投入の変化と生産性の向上、(4)農業所得の改善に焦点を当てながら、国際比較が試みられている。それらの分析を通じて、農業発展と経済全体の発展の相互依存性、土地と労働の相対的資源賦存条件の農業技術の選択における重要性、さらに経済発展に伴う食料需要の変化に対応した農業多様化のプロセス等が、克明に解明されている。より具体的なレベルでは、アジア農業の食料増産における華々しい成功と、それを可能にした「緑の革命」の歴史的意義が浮き彫りにされている。

第I部では、世界農業におけるアジア農業の発展の国際的位置づけがなされている。アジアの食料増産のペースは傑出して高く、1963年から88年までの年平均成長率は3.1%に達し、世界平均の2.4%を大きく上回ったばかりでなく、その間のアジアの平均人口成長率2.1%をも大きく凌駕した。穀物生産の伸びは著しく、25年間で4億トンから8億トンに倍増した。その背景には、米ばかりでなく小麦やトウモロコシの高収量品種の普及による「緑の革命」の増収効果がある。アジアの人口は世界全体の59%を占め、穀物の生産額シェアは40%を越えている。アジアの食料需給が改善したことが、世界全体の食料需給の改善に大きく寄与したことは疑いない。

アジア農業の特質は耕種作物、とりわけ米の比重が高いことであり、土地に恵まれていないことである。にもかかわらず、アジア諸国は世界最高の土地生産性の増加をつうじて農業生産の成長に成功してきた。第I部の分析では、相対的に労働生産性は低い土地生産性は高いというアジア型農業の特徴が、統計的に明瞭に描き出されている。

第II部ではアジア地域内の国々について、農業発展の等質性と特殊性がより詳細に分析されている。

アジアは、農業発展に関してまさに「優等生」であったが、「成長のアジア」と呼ばれるように経済全体の発展にも成功してきた。その結果農業の生産額シェアは全般的に低下したが、農業労働のシェアは依然として高く、ネパールやバングラデシュのように70%を越える貧困な国々もある。問題はこうした貧困国において、農業部門の成長率、経済成長率ともに低い傾向があることである。アジア全体の良好な農業のパフォーマンスは、中国とインドという二つの大国の農業発展の成功に大きく規定されており、アジア各国の農業発展は均等に実現されたわけではない。また、NIESや西アジア産油国における輸入飼料依存型の畜産の発展も目覚ましいものがあった。その結果、労働生産性については国際的格差が分析対象期間にむしろ拡大した。

周知のように、中国農業の発展の成功は集団農業から個別経営への移行や市場制度の改革によるところが大きい。インドの場合には、米と小麦の「緑の革命」の貢献が大きく、穀物の常習大量輸入国からの脱皮が実現された。その他に「緑の革命」によって飛躍的に穀物生産が増大した国としてパキスタンやタイを除くASEAN諸国、とりわけインドネシアをあげることができる。しかし、「少し油断をしてアジアでの食料生産が停滞するようなことになれば、一転してアジアのみならず、世界にとっても深刻な食料不足が発生しかねないのである。」という指摘の意味は大きい。

第II部のハイライトは、(1)第9章における総合生産性指数の計測と比較、(2)第10章と第11章で展開されている土地生産性、労働生産性、土地労働比の相違と変化に関する比較、さらにその背景にある技術的要因の究明、および(3)第13章の主成分分析によるアジア農業の類型化である。総合生産性の比較からは、日本農業の生産性の低下傾向や、農業における生産性と経済発展水準の間の正の相関が示されている。より興味深い分析結果は、土地生産性や労働生産性の上昇を通じたアジア各国の農業発展のパターンの共通性である。その背景には、土地・農業労働比率の相違と変化、それに起因する技術選択の相違がある。さらにアジア農業の類型化に関する分析からは、地理的に隣接した国同士での農業諸特性の共通性と連続性が析出されている。こうした分析結果は、本書の中心課題である農業発展プロセスの普遍性・法則性の存在を裏付けるものである。

第III部では、アジアの農業発展のアフリカ農業

への教訓、および21世紀に向けての農業の開発戦略について議論が展開されている。重大な論点は、「緑の革命」の重要性であり、それを継続することの必要性、さらにそれを実現するための国際協力の重要性である。とりわけ経済的・技術的先進国である日本の役割は重大である。また過去の「緑の革命」が灌漑地域を中心として限定的に展開されたという反省を踏まえ、今後は劣悪な条件下の農業に対する強力な研究開発の推進によって、「第二」の緑の革命の実現を目指すべきことが提唱されている。

以上が本書の概要であるが、実際の内容はきわめて多岐にわたっており、ここで言及することのできなかった重要な発見や論点は数多い。

評者は本書の農業発展論への貢献を大いに評価するものであるが、いくつかの問題点があることも指摘しておきたい。

第一は、総合生産性指数の計測に関する問題がある。総合生産性指数の計測結果は、「大局的にほぼ納得のできる国際格差と変化を示している」と著者は主張しているが、表9-4に示された数値から判断する限り、常識的な理解とは一致しない結果も得られている。しかしながら、総合生産性指数の計測に用いられた生産額指数と総投入指数の推定方法の説明が不十分なために、問題の所在が不明確であるという疑問が残った。

第二に、本書の主題の一つである「緑の革命」についてのいくつかの議論は、ミクロ的な分析が欠如しているために、説得力に欠けるように思われる。今やアジアにおける「緑の革命」は失速しようとしており、今後の食料需給の推移は筆者が考えている以上に深刻化する可能性があるように思われる。評者自身の研究によれば(David, C. C. and K. Otsuka, *Modern Rice Technology and Income Distribution in Asia*, Boulder, Col.: Lynne Rienner, 1993), 著者の主張に反して、環境が劣悪な地域で「第二」の緑の革命を起こすことは現実的にはきわめて困難であり、そうした地域の開発に限られた資源を大量に投入すれば、「緑の革命」は早晩終りを告げ、食料供給の増加率はますます鈍化してしまう危険がある。

第三に、著者自身が認めていることであるが、本書には制度的・政策的分析が欠けているという点が指摘できる。すでに著者は、農業政策と生産性の関係について、日本農業を基点にした国際比較を通じて優れた研究成果を発表している(Van der Meer, C. L. J. and S. Yamada, *Japanese Agriculture: A*

*Comparative Economic Analysis*, London: Routledge, 1990). こうした研究成果をアジア農業に適用し、さらに政策研究を深化させて欲しかったという読後感は禁じ得なかった。

上述した問題点をも踏まえ、著者には今後さらに一層アジア農業の比較研究を発展させていただくことを切に期待したい。

[大塚啓二郎]